



今年最後の労協連だよりになります。気温も急に下がり、各地で雪も降り始めました。

労協連の活動も多岐に渡り、年内に一つ一つまとめておきたいと思いますが、ポレポレ東中野での映画上映が終わり、来年11月29日に予定している「いま、『協同』が創る2019全国集会 in kanagawa」(仮称)の第1回実行委員会が開催され、山口県光市・平生町での首長懇談があり、そして月末には九州での協同労働リーダー基礎研修があるなど、慌ただしい毎日を過ごしています。

映画「workers 被災地に起つ」には、2,000人を超える方が鑑賞されました。組合員や家族・友人、協同組合関係者、そして一般の方が多く観られました。なかには実際の現場がみたいと視察に来られ、協同労働について話しあいました。そのなかではこれから働き方は生活と地域が重なることが必要で、お金を得る稼業だけでなく、地域を維持するような役目や人と人を繋げる社会づくりなどの務めが求められ、若者たちも実践を通じて楽しみ、居場所や充実感を感じる働き方が大事だと、議論されています。

光市での市長懇談でも、市長より協同労働についての質問が数多く出され、協同労働の理解も深まると同時に、人に認められる仕事の必要性や人との対話を大

事にするまちを目指し、不寛容な時代にこそ必要な協同の仕組みではないかという共感をいただきました。

協同労働リーダー基礎研修は今年度第2回目を鹿児島県国分ほのぼので開催し、岡元ルミ子所長を中心とした、高齢者・子ども・障がい児を中心においたケアが軸となり、事業と活動が拡がっていく取り組みを学びました。組合員一人ひとりが主体的に働いていることが非常に印象的であり、常に一人ひとりが「よい仕事」を意識し、全体で話し合い、まずは「やってみよう」と取り組まれている姿に驚きました。他業種であっても、一人ひとりの意見を大事にし、みんなで合意し、取り組んでいる雰囲気を感じました。余談ですが、研修中に学童クラブの送迎車がパンクした際に、研修参加者の若手二人が速やかにタイヤ交換をやってのけた場面も素晴らしかったです。

来年は協同労働法制化の年であると考えたときに、労協連として「7つの原則」の理念を発信し、協同の働き方・実践を伝えていくことが大事ではないかと議論しています。また地域レベルでの立ち上げ支援や、立ち上げたのちの団体同士の相互サポートの必要性も語られています。法制化に向けて、多様な段階で想定の検討を拡げていければと思います。